

中国語可能補語の日本語訳について

— “V 得/不 C” を例として —

A Study on the Japanese Translation of Chinese Potential Complements

-Using “V *de/bu* C” as an Example-

韓 樹坤

HAN Shukun

Abstract : 中国語の可能補語形式 “V 得/不 C” は、その意味に基づき、「能力可能」「条件可能」「属性可能」「認識可能」の4つに分類できる。本研究では、この意味分類を基に具体的な用例を用いて、“V 得/不 C” が異なる意味を表す際の日本語の可能表現との対応関係を考察した。その結果、“V 得/不 C” が「能力可能」「条件可能」「属性可能」を表す場合、日本語の可能表現と多く対応することが明らかになった。一方、「認識可能」を表す場合には、日本語では他の表現形式や無標識で対応することが多いことが分かった。つまり、中国語は「可能」を示す際に、形式が固定されており、他の表現形式が用いられにくいのに対し、日本語は「可能」を示す際に、特定の形式に拘らず、語用論的に多様な形式を柔軟に使用する傾向がある。

Keywords : 中国語 可能補語 “V 得/不 C” 日本語訳 対応関係

目次

- 1 はじめに
- 2 “V 得/不 C” の意味分類について
- 3 考察
 - 3.1 能力可能
 - 3.2 条件可能
 - 3.3 属性可能
 - 3.4 認識可能
- 4 おわりに
- 参考文献

1 はじめに

中国語の可能補語には、“動詞+得/不+了”と“動詞+得/不得”の他に、“動詞+得/不+趨向補語/結果補語”という形式もあると思われる。その中の「趨向補語」と「結果補語」については、房玉清(1992)、

刘月华等(2001)などが詳しく説明している。具体的には、趨向を表す動詞を補語として充てるものは、趨向補語と呼ばれる。以下のように三分類することができる。

(1) 来、去

(2) 上、下、进、出、回、过、开、起

(3) 上来、上去、下来、下去、出来、出去、回来、回去、过来、过去、开来、开去、起来

それに対し、形容詞や動詞を補語として充て、ある動作や状態が具体的な結果を引き起こす(または引き起こす可能性がある)ことを示すものは、結果補語と呼ばれる。話し言葉の中で、単音節形容詞(たとえば、“大、小、高、低、长、短、远、近、对、错、透、齐、好、完、惯、活”など)は一般に結果補語として使用でき、一部の話し言葉ではよく使われる二音節形容詞(たとえば、“清楚、糊涂、明白、整齐、结实、暖和”など)も結果補語として機能することがある。しかし、動詞は結果補語として使用できるものが少なく、一般的なものには“见、成、懂、走、跑、哭、笑、掉、着、倒、翻、透、到”などがある¹。

一方、日本語の可能表現には「動詞未然形+れる・られる」「五段動詞の可能動詞」「サ変動詞語幹+できる」「動詞連体形+ことができる」「動詞連用形+うる(える)」などの表現形式がある。これらの可能表現は形式上の違いがあるものの、「能力可能」「属性可能」「条件可能」「認識可能」などの意味を表すこともできる(渋谷勝己 1986、張威 1998、中井政喜・呂雷寧 2014などを参照)。“動詞+得/不+趨向補語/結果補語”は日本語に訳される際には、日本語の可能表現に対応すると対応しない場合とがあるため、具体的にはどのような場合に対応し、どのような場合に対応しないのか、その原因は何にあるか。また、両言語の可能表現はどのような共通点と相違点を有しているのか。これらの問題点についての考察はまだ十分には行われていないようであるため、本研究では、“動詞+得/不+趨向補語/結果補語(V得/不C)”を中心に、その意味を分類した上で、具体的な例を挙げながら、その日本語に訳する際の文法的特徴などに考察し、日本語訳の具体的な方法を明らかにする。

2 “V得/不C”の意味分類について

“V得/不C”の意味については、刘月华(1980)、房玉清(1992)、張威(1998)、刘月华等(2001)、吴福祥(2002)、姚艷玲(2008)、安本真弓(2009)など、すでに多くの研究がなされている。具体的には、刘月华(1980)では、“V得/不C”という可能補語構造はある結果や趨向を含んでいるため、その文法的な意味を「ある主観的または客観的な条件がある動作・行為の結果や趨向を実現可能にするかどうか」というように要約できると指摘している。“V得/不C”の意味を以下のように三分類することができる。

(1) ある能力を持ち、または主観的な条件がある動作・行為を実現可能にする。

(2) ある客観的な条件を満たし、またはその客観的な条件がある動作・行為や変化を実現可能にする。

(3) 可能性がある。

これを踏まえ、刘月华等(2001)では、“V得/不C”は意味において“(不)能”と完全に同じではなく、「情理から許されるかどうか」や「許可・不許可」の意味を表す際には、“(不)能”を使用する

¹ “走”と“跑”が結果補語として用いられる場合、「離れる」という意味を表す。

ことができるが、“V 得/不 C”は使用できない。その一方で、房玉清（1992）と吳福祥（2002）はそれぞれ、「ある動作の結果や趣向を実現する能力があるかどうか」「ある結果や変位を実現する可能性があるかどうか」といった、“V 得/不 C”の意味を概括している。

張威（1998）では、「結果可能」と「認識可能」との二つの概念を提出し、“V 得/不 C”の「V」が意志動詞である場合、可能補語形式は「動作主の動作が行われた後、動作主が意図していた事柄の実現を表す C が果たして成立し得るか否か」という「結果可能」の意味を表すのに対し、“V 得/不 C”の「V」が無意志動詞である場合、可能補語形式は「V+C」構造の表す事柄の実現する可能性についての話し手の認識・判断である「認識可能」を表すこととなると指摘している。

また、姚艷玲（2008）は、“V 不 C”の意味を「動作主によって意図されている動作・状態の非実現」、つまり「不可能」としているのに対し、安本真弓（2009）は、それを「動作を実行しても、『能力』または『条件』を満たしていない、つまり障害があるため、結果出現可能に影響を来し、結局できない」と定義している。

これらの研究では、“V 得/不 C”の意味分類について詳しく論述しているが、この可能補語形式の性質については十分に描かれていないようである。そのため、本研究では、これらの先行研究を基に、“V 得/不 C”が表す意味を「能力可能」「属性可能」「条件可能」「認識可能」とする。具体的には、“V 得/不 C”は有情物の能力（本来備わった能力と習得した能力を含む）だけでなく、無情物の一般的な属性・機能・価値によって実現できるかどうかをも表すことができる。また、動作主体の意志や能力とは関係なく、ある事柄が何らかの条件から許されて実現可能かどうかやその事柄が実現する可能性があるかどうかに対する認識などを表すこともある。その後、具体的な例文に基づいてこれらの意味が表す際には、“V 得/不 C”の日本語訳について詳しく考察し、その背後にある原因などを検討する。

3 考察

3.1 能力可能

“V 得/不 C”が「能力可能」を表す場合、主として日本語の可能表現に訳される傾向がある。たとえば、

- (1) 从此便躺了下去，有时还挣扎着起来，以后就走不动了。（谢冰心《关于女人》）

それ以来床にふせてしまい、時々なんとか起き上がろうとしていましたが、ついには動けなくなってしまうのです。（竹内実訳『女のひとについて』）¹

- (2) 第二个女人，我永远忘不掉的，是 T 女士，我的教师。（谢冰心《关于女人》）

つぎに思い浮かぶのが恩師の T 先生で、私にとって永遠に忘れられない女のひとである。（竹内実訳『女のひとについて』）

- (3) 她分辨不出什么是逢场作戏，什么是倾心相爱。（戴厚英《人啊，人》）

¹ 本研究で使用する用例は『中日対訳コーパス』（第 1 版、2003）から抽出したものである。

² 馬庆株（1988）によると、“忘”は“非自动词（無意志動詞）”であり、動作の発出者がその動作を自由に制御できないことを示す。“忘不掉”は、“忘”という動作が動作主体の能力で制御できないことを意味するため、本研究では“忘不掉”の意味を「能力可能」に分類する。

彼女は気まぐれな遊びとほんものの愛情が区別できない。(大石智良訳『ああ、人間よ』)

- (4) 王一生再挣了一下，仍起不来。我和脚卵急忙过去，托住他的腋下，提他起来。他的腿仍然是坐着的样子，直不了，半空悬着。(阿城《棋王》)

王一生はまた身じろぎしたが、依然立つことができなかったので、ぼくとのつぼが急いでそばへ行き、両脇をささえて引き上げてやった。だが、彼の足は相変わらず座っていたときそのままに、宙に浮いていた。(立間祥介訳『チャンピオン(棋王)』)

例(1)では、動作主の「動く」能力が主観的または客観的な原因で無くなっていることが示唆されているのに対し、例(2)では、話し手の「忘れる」能力が発揮できないことが強調されている。一方、例(3)では、動作主の物事を区別する能力をあまり有しないことが示唆されているが、例(4)では、動作主の「立つ」能力が何らかの原因で一時的に失ってしまうことが強調されている。これらの“走不动”“忘不掉”“分辨不出”“起不来”といった“V不C”構造がそれぞれ「五段動詞の可能動詞」「動詞未然形+れる・られる」「サ変動詞語幹+できる」「動詞連体形+ことができる」という日本語の可能表現形式に訳されているため、形式的にも意味的にも対応していると言える。

一方、他の形式に訳される例もあるが、それほど多くない。たとえば、

- (5) “看你的神情，你似乎还有些期望我，——我现在自然麻木得多了，但是有些事也还看得出。……”
(鲁迅《彷徨》)

「君の顔色を見ると、君はまだすこしは僕に期待をかけているようだね—そりゃあ、いまじゃすっかり鈍感になってしまっているけれど、それくらいのことはわかるよ。…」(松枝茂夫・和田武司訳『彷徨』)

- (6) 但是她和两个孩子的力气是太小了，她们无论如何抬不动身躯高大的倪吾诚。(谢冰心《关于女人》)

でも自分と二人の子供だけでは、大柄な夫をどうしようもない。(竹内実訳『女のひとについて』)

例(5)では、“看得出”は話し手の物事がわかる能力を有することを強調しており、日本語に訳されると、「わかる」だけでもそういう意味を表現することができるため、可能表現を使用しなくても問題ないと考えられる。それに対し、例(6)では、“抬不动”は動作主の運ぶ能力が年齢や身体的な原因であまり発揮できないことを強調している。この際には、形式の対応を考えせずに、「どうしようもない」という表現に訳され、意味だけを視野に入れて考えているため、日本語の可能表現に対応しているとは言えない。

3.2 属性可能

“V得/不C”が「属性可能」を表す場合、その用法は「能力可能」と類似しており、日本語では通常、可能表現として訳されることが多い。一方で、他の表現形式に訳されるケースは極めて少ない。たとえば、

- (7) 家里用的铺盖，校里用不着。(茅盾《霜叶红于二月花》)

- 家で使っている蒲団は、学校では使えないのよ。(立間祥介訳『霜葉は二月の花に似て紅なり』)
- (8) 漂泊着的农民们经历了多少辛酸苦辣呀！旧话太多了，说不尽，讲不完。(浩然《金光大道》)
農民たちはどれほどの辛酸をなめてきたことか！昔の話はあまりに多すぎても語りつくせる
のではない。(神福勇夫訳『輝ける道』)
- (9) 我也曾经是一张白纸，可是生活在我的白纸上涂抹了浓重而灰暗的底色。这底色是永远也洗不去的。(戴厚英《人啊，人》)
私も昔は白紙だったけれど、生活の中で濃い灰色に塗りつぶされてしまった。この色は永遠に
洗い落とせない。(大石智良訳『ああ、人間よ』)
- (10) 夜间很冷，有点小风，虽然摇不动树枝子，刮不起尘土，却“嗖嗖”的挺尖厉。(浩然《金光大道》)
夜の冷えこみは厳しい。樹木の枝を騒がせたり土ぼこりを上げたりするほどでもない、風が
ヒューヒューと肌を刺す。(神福勇夫訳『輝ける道』)

例 (7) では、蒲団の属性や機能、価値が学校の環境では十分に発揮されないことが示されているが、例 (8) では、昔の話という無情物が多すぎるため、農民たちによって全て語り尽くされることが不可能であることが表されている。また、例 (9) では、無情物である「この色」が「濃い灰色」として表現され、その象徴的な機能や属性が際立っているため、「洗い落とす」という行為が実現できないことが暗示されている。これらの例文における「用不着」「说不尽」「讲不完」「洗不去」といった“V 不 C”構造が全部「五段動詞の可能動詞」という日本語の可能表現形式に訳されているため、形式的にも意味的にも対応していると言える。これに対し、例 (10) では、無情物である「風」が強くないため、土ぼこりを上げる属性や機能があまり発揮できないことが強調されている。この場合、語用論的な視点から考えて「刮不起」を「上げたりするほどでもない」という表現に訳され、形式的には対応する訳ではないが、より自然な表現だと考えられる。

3.3 条件可能

“V 得/不 C”が「条件可能」を表す場合、その用法は「能力可能」や「属性可能」と類似しており、日本語では多くの場合、可能表現として訳される。たとえば、

- (11) 吕瑞芬轻轻地叹口气说：“没好利落。刘祥大叔的脚又化了脓，肿得象个小冬瓜，穿棉裤都伸不进腿去……” (浩然《金光大道》)
呂瑞芬はフツとため息をついた。「どうもはっきりしないの。劉祥さんの足のほうも化膿して、トウガンの小さいのくらいに腫れちまって、ズボンに足が通せないほどよ」(神福勇夫訳『輝ける道』)
- (12) 看看那一张张纯朴可爱的笑脸，我说：“咱们陶庄不会永远这么穷，等你们长大了，陶庄的粮食会多得囤也盛不下，车也装不完。”(巴金《家》)
ひとりひとりの顔を見ながら話してみた。「あたしたちの陶庄は、決していつまでも貧しいわけじゃないのよ。みんなが大きくなったら、陶庄の穀物はきっと大きな麦囲いにも入りきらないし、車にも積みきれないようになるわよ。」(飯塚朗訳『家』)

- (13) “这远的路，就是去，没钱也住不下呀。苦命哟，谁让她托生个女人哩……”（张海迪《轮椅上的梦》）

「あんなに遠いし、運んだところで金がなければ入院できんさ。運が悪いよ、どうして女に生まれたかねえ…」（飯塚陽訳『車椅子の上の夢』）

例(11)では、“伸不进(腿去)”は動作主の足がズボンに通す主観的な条件が一時的にないことを示唆しているのに対し、例(12)では、“装完”という動作・行為の結果が実現する条件が現在のところ有しないことが強調されている。また、例(13)では、“金”という客観的な条件がなければ、“入院”という動作の結果が実現できないことが表されている。これらの“伸不进(腿去)”“装不完”“住不下”といった“V不C”構造がそれぞれ「五段動詞の可能動詞」「サ変動詞語幹+できる」などの日本語の可能表現形式に訳され、形式と意味の上では対応していると言える。

一方、他の表現形式に翻訳されるケースもあるが、その数は多くない。たとえば、

- (14) 你晚两分钟，下一个站就得跟着咱们晚点，别的列车就得窝在别处进不来。（浩然《金光大道》）

ここで二分遅れると、次の駅ではもっと遅れて、ほかの列車が立往生してしまい～（神福勇夫ら訳『輝ける道』）

- (15) 自己只要卖力气，这里还有数不清的钱，吃不尽穿不完的万样好东西。（老舍《骆驼祥子》）

働きさえすれば、金はずぎつぎにはいつてき、食おうが着ようがなくなることのないすばらしいものが無限にあるのだった。（立間祥介訳『駱駝祥子』）

例(14) (15)では、条件を示すマーカーの「と」や「ば」があり、後ろの動作や行為の実現がある条件が具備しなければならないことが表されている。具体的に言えば、例(14)では、他の列車が入らない結果の実現する条件が示唆されているのに対し、例(15)では、素晴らしいものを食べ尽くせないまたは着尽くせない条件が強調されている。例(14)の“進不来”と例(15)の“吃不尽”“穿不完”は全部日本語の可能表現形式に訳されないが、文の意味だけを視野に入れ、無標識や他の表現形式に訳されるのが問題ないと考えられる。

3.4 認識可能

“V得/不C”が「認識可能」を表す場合、日本語では可能表現として訳される例はあまり多くないようである。たとえば、

- (16) 可是我知道，有几个人已经找不回来了，永远找不回来了！（戴厚英《人啊，人》）

何人かのはもはや連れもどせぬ、永遠に連れもどせぬのだと、わしには分かっていた。（大石智良訳『ああ、人間よ』）

- (17) 虽然汗珠劈劈啦啦的往下落，他还觉得自己不干净——心中那点污秽仿佛永远也洗不掉（老舍《骆驼祥子》）

汗がポタポタしたたりおちていたが、それでも自分が不潔そのもののように思えた。あの心中の汚点は永遠に拭いさることができないように思えた。（立間祥介訳『駱駝祥子』）

例 (16) (17) では、時間を示す副詞“永远”が“找不回来”“洗不掉”という“V 不 C”構造を修飾し、“找回来”“洗掉”という動作・行為の結果が実現する可能性がないことに対する話し手または動作主の認識が示唆されている。“找不回来”“洗不掉”はそれぞれ「五段動詞の可能動詞」「動詞連体形+ことができる」に訳され、形式と意味において対応していると言える。

しかし、日本語訳では、他の表現形式や無標識の形が用いられる例が非常に多い。たとえば、

- (18) 辛小亮心里哪怕打起一个浪花，也逃不过她的眼睛。(陈建功《丹凤眼》)

辛小亮の心に生じたどんな小さなさざ波も見逃がすはずはなかった。(岸陽子・斎藤泰治訳『鳳凰の眼』)

- (19) 人们都认为这个小媳妇是再也回不来了。(张海迪《轮椅上的梦》)

誰もが、あの若い嫁を二度と見ることはあるまいと考えた。(飯塚陽訳『車椅子の上の夢』)

- (20)这《卓文君》，排得出来吗？吴祖光先生编的《凤求凰》，已经由别的团排出来公演了，基本上是张派的唱法。(刘心武《钟鼓楼》)

.....この『卓文君』の出しもの、うまくいくかしら。吳祖光先生の脚色した『鳳、凰を求む』はもうほかの劇団が上演したけど、あれはだいたい張派の唱い方だわ。(蘇琦訳『鐘鼓楼』)

- (21) 我们四周的那些坏事，坏人，你一定是看够了。可是，如果你这是第一次看见他们，你一定更看不惯，更难受。(张爱玲《倾城之恋》)

僕たちの周りのあしたの悪事や悪人を、うんざりするほど目にしてこられたのでしょうか。でももしあなたが、そういうものにいま初めて出会ったのだとしたら、いよりもっと耳障りで辛く感じただろうと思うんです。(池上貞子訳『傾城の恋』)

例 (18) では、“逃不过”は動作主の“辛小亮”が彼女を見逃す可能性がないことを示唆しているのに対し、例 (19) では、「あの若い嫁」を二度と見る可能性がないことに対する人々の認識が強調されている。“逃不过”“回不来”はそれぞれ「～はずはない」「～あるまい」という表現に訳され、形式の上では日本語の可能表現に対応しないが、意味の上では「可能性がない」や「推測」などの意味を表すことができるため、語用論的見れば問題ないと考えられる。また、例 (20) では、“排得出来”は疑問文に用いられ、『卓文君』の出し物がうまくいく可能性があるかどうかという認識を示唆している。これと類似しており、例 (21) では、“看不惯”の前に“一定”という副詞があるため、話し手は動作主の悪事や悪人を初めて見る時に不快感を必ず起こすことに対する認識、つまり百パーセントの確信があることが強調されている。これらの場合は、日本語の訳文には、可能標識が省略されても、文の意味理解できるため、自然な文だと考えられる。

4 おわりに

本研究では、中国語の可能補語形式の一つである“動詞+得/不+趨向補語/結果補語 (V 得/不 C)”に注目し、「能力可能」「属性可能」「条件可能」「認識可能」の4つの意味に基づいて、この補語形式の日本語訳について分析を行った。その結果、“V 得/不 C”が「能力可能」「属性可能」「条件可能」を表す場合には、主に日本語の可能表現形式に訳される傾向が見られ、両言語が対応していると言える。一

方、「認識可能」を表す場合には、日本語の可能表現形式に訳される例は少なく、代わりに他の日本語表現形式や無標識に訳される例が多いことが明らかになった。このことから、中国語と日本語の可能表現には意味範疇による対応の違いが存在することが確認された。本研究の成果は、両言語間の可能表現の対照研究を深化させるとともに、翻訳実務や言語教育における応用に寄与するものである。

参考文献

中国語

房玉清（1992）《实用汉语语法》北京语言大学出版社

刘月华（1980）〈可能补语用法的研究〉《中国语文》第4期

刘月华、潘文娣、故韡（2001）《实用现代汉语语法（增订本）》商务印书馆

马庆株（1988）〈自主动词和非自主动词〉《中国语言学报》第3期

吴福祥（2002）〈汉语能性述补结构“V得/不C”的语法化〉《中国语文》第1期

日本語

渋谷勝己（1986）〈可能表現の発展・素描〉『大阪大学日本学報』第5号

張威（1998）『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお出版

中井政喜・呂雷寧（2014）「日本語における可能の意味について」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第47号

安本真弓（2009）『現代中国語における可能表現の意味分析—可能補語を』白帝社

姚艶玲（2008）「〈不可能〉の言語化に関する日中両語の対照研究」『日本語と中国語の可能表現』白帝社